

柿野浦って こんなところ



両津から海を左手に見ながら車で約45分走ったところに「柿野浦」という集落があります。お店は酒屋さん1軒で、戸数は30戸あまり。晴れた日は散歩するおじいさん、おばあさんとよく出会う穏やかな集落です。初めて来た時、本当にこの先に研修所があるの、と不安に襲われました。急で曲がりくねった山道を約1キロ上がるとそこが「旧岩首中学校＝鼓童研修所」です。柿野浦は自然が美しく湧水のおいしさは天下一品、そして皆さん温かい方々ばかり。2年間をかけて私達の第二のふるさととなっていくこの素敵な柿野浦を研修生が紹介します。

文とイラスト 赤名卓大、ジョン内倉、
喜内美和、松井元



祭

四月十五日。一生に一度しかできない柿野浦の住人としての祭りです。二年生は地元の方から鬼や太鼓の打ち方を習います。「地元の人ができるのと何か違うんだよねあ。」と言われ、必死に稽古する十三日間。祭の夜になって自然に体にしみ込んでいく「間」や「ユアンス」。柿野浦が自分の集落なんだという思いが強くなりました。

(美和)

頂き物

息が荒くなり十kmのランニングの最後を飾る一・二kmの上り坂が残っていた。突然「ジョンさん！ ちょっと待って！」振り向いたら川嶋さんが呼んでいる姿が見えた。「研修所にジャガ芋あるか？一人では食べきれないんだ。頼むから少し持って行ってくれ。」

「あつ、ありがとございます。」「良かった。捨てなくてすんだ。」川嶋さんのホッとした表情に、僕も笑顔で5kgの袋を担いで坂を登った。(ジョン)

防火訓練

十月二十日、毎年この日に防火訓練をします。昭和三十六年十月二十日、柿野浦は焼け野原になる程の大火がありました。あの日の恐ろしかったこと、復興大変だったことを涙を流しながら教えてくれました。研修所も大切な建物。私達も日々気をつけなければと実感しています。(卓大)

優しいおばあちゃん

僕は朝のランニングで散歩をしているおばあちゃん、宮川さんによく出会います。いつもなら「おはようございます」の一言の挨拶だけで終るのがその日おばあちゃんは両手を大きく振りながら「待てや、待てや」と上半身裸で走っている僕の片腕を掴んできて、「そんな裸で走って寒いやろ」と心配そうに話しかけてくれました。とても優しいおばあちゃん、心配してくれたのは嬉しかったけど。(元)



「川嶋さん」



いつも見守られて

稽古場にある太鼓が二つ濡れていました。「水濡れだ」と思いながら直し方が分からない。数日後、柿野浦の小川さん、渡辺さん、南さんが直してくれたと聞き、玄關の前にある松の木が松食い虫にやられて、校舎に倒れたら大変。ある日、南さんと渡辺さんがまた登場して、チェーンソーで見事に処理してくれました。集落のみんなで建てた昔の中学校への愛情を感じます。(ジョン)

道路整備

柿野浦のおじいちゃんおばあちゃん、持っているパワーとスピードは僕達よりはるかに上回っています。それを実感したのは春に行われた道路整備。年齢が僕らの倍以上あるのに一本のクワを持つとそれは鬼に金棒。側溝に溜まっていた土砂や石を簡単に掘り出してしまいました。長年の農作業から鍛えられた足腰は僕らが一番必要としているものです。(元)



「」は柿野浦

みんな農業の先生だ!

鼓童村での稽古から帰ってくると、玄關先に大きな白菜が二つと大根が五本。今日はどなたからなのか、「二つして」と野菜を持って来てくださいます。柿野浦のみなさんに見守られて、生活させてもらっているんだなあ! 愛情いっぱい野菜を抱きかかえひしひしと感じました。(卓大)



私達研修生は、地域の方々に支えられ、お世話になりながら日々生活しています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。研修所を修了しても、大好きな柿野浦にまた遊びに来させてください!